

〔文献紹介〕

岐阜県史および岐阜市史

郷土史ブームの中でという意味ではなく、岐阜県では岐阜県百年記念事業の一環として、昭和三八年以降、初の修史事業が進められ、その全二二巻（通史編九巻、史料編一三巻）が昭和四八年をもって完結した。各巻ともA五版一、〇〇〇頁前後の大冊で、監修者として宝月圭吾・所三男の両博士を頂き、執筆者には地元岐阜大学を中心として多くの史学者が参加している。また現代史は地理学者で執筆せよということで、岐阜大学の上島正徳教授を中心として、安藤万寿男・高橋百之・坪内庄次の四名が参加した。全体を通覧して、通史編九巻よりも史料編一三巻が特に研究者にとっては貴重であり、八冊の付録絵図が更に花を添えている。筆者は古代・中世の史料についての評には自信を欠くが、近世の特に戸口関係については、家並改一五件、人別改九件、宗門改一〇件、五人組五件、移動二一件など興味深々、特に岐阜上竹屋町家並改書（承応三年）や、岐阜魚屋町宗門改帳（正徳五年）などは、これまで未知の近世岐阜町の人口構造を知る上にきわめて貴重と思われる。飛騨高山町（天保一四年）のそれについては、筆者がすでに報告（歴史地理学紀要四）したところのものである。なお地理学徒四名の執筆による現代史は、日本地誌第一二巻愛知県・岐阜県（昭和四四年二宮書店）が発刊されてから間もないことであって、資料の整備上は好都合な面もあつたが、政治・財政・治安・金融・宗教・文化などの執筆に当っての

苦心は、あながち筆者のみではなかったようである。

岐阜県史の完結をみた昭和四八年、県都岐阜市は本格的な市史の編集に着手することとし、通史編五巻、史料編七巻、計一二巻におよぶ市史の全体構想をたてて編集事業を開始した。昭和五十一年九月現在では、史料編古代・中世および史料編近世一（同付図）の発刊を見て、各巻ともA五版八〇〇頁前後の大冊で、岐阜県史の体裁と略々同じであり、監修者も県史と同じく宝月・所の両博士、執筆者には地元岐阜大学を中心として多くの史学者が参加している。また現代史は地理学者が参加することとなって、昭和五十一年九月第二回目の研究会議をもったが、県史の四人の外に、地理学者としては合田昭二・関根清・国島秀雄・和田集の四名が加わり、昭和五五年完結の予定である。さてその内容について、ここでも史料編近世についてみると、それは三巻とし、今回刊行の近世一には岐阜町・加納町とその周辺地域の古文書が採録されている。近世二には長良川以北の村地域、近世三には長良川以南の村地域の史料を家別に配列する予定になっている。その採録史料のほとんどは古文書で、若干の古記録が含まれるが、紀行文・軍記物・金石文などは紙数の関係で割愛された。今回刊行の近世一の収録史料は家別にして三六を数えるが、そのほとんどは今回の市史編集過程で新しく発見されたものである点が貴重である。戸口関係では、岐阜町の西材木町や下今町の宗門改帳の外に、加納城下町の魚屋町などの宗門改帳が見られることが嬉しい。

要するに岐阜の地は畿内に近く、東西交通の要衝にあつて、東西文化の交流接触地点に位置することはいうまでもなく、この地域で、

しかも新しい未知の史料を豊富に盛り込んだ岐阜県史および岐阜市史が続いて刊行せられることを、注目すべき快挙として紹介する次第である。各巻ともA五版八〇〇〜一、〇〇〇頁。元売捌書店は岐阜市神田町六丁目大衆書房。各巻三、〇〇〇〜四、〇〇〇円前後。

(坪内庄次)

佐藤甚次郎著 生活文化と土地柄

—生活地理学序説—

地理学を構成する根本概念を、地域・分布・環境とするならば、それが自然現象であろうと、社会現象であろうと、この根本の概念にしたがって分析や総合がなされるならば、それはどんな名称を何と言ってつけようと、地理学的ベースに基づく研究であることに違いない。

人文地理学は地理学の中でも、人間活動によるもろもろの現象を地理的観点から研究することを主体として発展したものであることは言うまでもないが、その人間活動の根底である衣・食・住などの生活の営み方や、そこに形成された生活文化を人文地理学で研究対象とすることが、従来きわめて閑却されてきたのである。この点については、故内田寛一先生は早くよりこの部門の研究の必要性を主張され、昭和一二年には既に「郷土地理・特に衣食住について」などを発表しておられる。本書の著者が、現在この部門のオーソリテ―として活躍しているのも、かつて、内田先生の要望により、大学で「生活地理学」の講義をするように言われたことより始めると聞

いている。著者が最初は何をどのようにやったらよいか、いささか面喰ったと聞いているが、そこは著者本来の深遠多才な学問的背景や、応用能力の卓越していた素質があったればこそ出来たものであることは申すまでもない。

絢爛たる美しさをもった学問の世界で、「高尚」と言うことからするなら、日常生活などの具体的事象を多く取り扱うことは、多少逸脱とみなされがちであるが、しかし、人間生活本来の姿を通じ、人間の地域的分化や、地域的特色を知るには、最も優れた指標として注目しなければならぬ。しかも、人文地理学では、地表上の諸地域で展開されている人間活動の様態を対象として、その本質なり実態を正しく把握することを重視されなければならない以上、奇麗ごとのみ並べたても真の解明にはならない。したがって最も根本的な主要課題として衣・食・住などは解明されなければならないのに、このような著書が今までにあまり見られなかったことは、むしろ不思議なくらいである。変転きわまりない経済情勢、今日こそ、人間生活とは何であるかを明確にしておく必要がある。

本書では地表上の諸地域でどのような生活が営まれ、それが生んだ文化は、現在いかなる地域にどのような形態で残存しているかなど、歴史地理的に極めて多くの具体例をあげて述べている。さらに生活に関する多くの資料をもとに、人間、そして生活の在り方が根本的に問われているし、また、現時点では、どのように認識するか、思考の基盤はどこにおくかなどを解明し、生活を土地に密着した実例で述べ、また、その文化を論じ、しかも、系統的学問体系の中に組み込まれたユニークな極めて優れた必見の書である。